

語彙の効果的な勉強法の実践

—日本語初級者を調査対象にして

大連外国語大学 劉 芸寒

1 実践背景

第2言語学習において、単語の学習は基本的課題である。そして、日本語初級者にとって、単語の習得レベルが日本語4技能向上にもっとも影響しうる要因の一つだと思われる。しかしながら、単語の勉強に大量の時間を取られ、勤勉にやっているものの、学習した効果が悪いと学生からしばしば文句が聞こえる一方、教える側から、学生が単語習得過程で、教師が授業中で果たすべき役割は何か思考する必要があると思う。そこで、日本語初級者の単語の学習状況を把握するために、日本語をゼロから勉強して2か月を経た学生を対象にアンケート調査をした。

1-1 事前調査

・調査時間：2015年11月2日

・調査対象：大連外国語大学日本語学部一年生14クラスのうち、筆者が担当している2つのクラス(54人)で実施。

・調査内容：アンケート調査を通し、学習者が放課後単語の学習状況(新出単語の覚え方及び戸惑い)を知った上で、認知心理学の視点からその学習過程の妥当性を考察し、効果的な学習法を見出す。

・調査結果

a、問1(日语学习中最难的项目是什么?)の答えは「単語の覚え(44人)」が「文型の習得(12人)」 「会話の理解(4人)」を超えて圧倒的に多かった。

b、問2(用什么方法背每课的新单词?)の答えは「声を出さずに、単語を書いて覚える」は48人に対して、「声を出して読んで覚える」は10人、「教科書の付CDを聞いて覚える」はただ8人という大きな差が見られた。

c、問3(写一写在背单词方面困扰你的理由。)は自由記述の質問であり、筆者が自由記述を分類した結果は以下の表である。

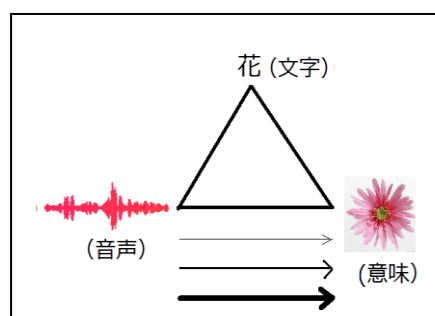
	項目	人数
①	毎課の新出単語を覚えるだけに相当時間（勉強時間の半分以上）かかる	35人
②	2.3日のうち、せっかく覚えても忘れてしまう	10人
③	単語を覚えたと思っても、ヒヤリングですぐに聞き取れない	29人

④	単語を覚えたと思っても、単語テストで正しく書き取れない	15 人
⑤	実際に使うときになると、せっかく覚えても、思い出せなくて、単語帳に頼りがちである	33 人

1-2 調査分析

《中学英語语音教学缺失与学生听力理解障碍的相关性研究——以上海市新中高级中学高一学生为例》の中で、季晓彦(2013)が中等教育段階までの英語教育はテストの制約があるため、有効な音声教育活動が非常に少ない。その結果、学生が聞く・話す能力に欠けている。また、単語習得においても、発音を意識しない学生がかなり多いため、結局単語を見たり読んだりした時にしか分からない語彙力になってしまいがちだと指摘した。日本語初級者はすでにこれまで英語の勉強法に慣れてしまい、単語習得の中で、音声活動が欠如しているため、単語の覚えに多くの力を入れたというものの、聞くや話すのが弱化成ることになってしまう。

笹沼澄子(1995)が「読みの過程の普遍性と言語特異性—失読症者の障害パターンから」の中で個々の単語(図の花)は、文字と音と意味の情報を有し、これらの情報とその相互関係がわれわれの脳内辞書になんらかの形で符号化されていると指摘した。たとえば、「花」の文字単語



を読む際、視覚分析で正しく識別されると、脳内辞書に記憶されている多数の単語の文字コードの中から花に対応する文字コードが活性化され、ついで意味コードや音韻コードも活性化される(つまり花の読解や音読みが実現する)。これによると、多くの学習者にとって、聞き取れないや言い出せないのは、

音声と意味の回路の働きが弱いからだと判断できる。音声と意味の回路の働きを強める方法は、音声を媒介とする記憶活動にほかならない。本実践で筆者は新単語の予習や復習の段階で、教科書の付 CD を聞きながら復唱する方法を推奨した(音声から意味の回路、音声から文字の回路を強化しようとするのが目的である)。

一方、森 敏昭(1995)が「記憶の仕組み」で、短期貯蔵庫内の情報は、リハーサルやコーディングなどの記銘処理によって長期貯蔵庫に転送された情報は、長期記憶としてはほぼ永久的に保持されると指摘した。コーディングとはイメージ化や体制化など精緻処理をさしている。たとえば、リンゴを記銘する際に、リンゴのイメージを思い浮かべたり、果物の概念と関連づけることによって、単語をグループごとにまとめて(体制化して)覚えたりすることである。本実践は単語習得の中で、単語の意味をする絵や画像を導入することにより、記憶過程を強化する同時に、覚えた効果を検証したいと思う。

2 実践概要

・実践目的

教科書の付 CD(新出単語リストの部分)を流して復唱して覚えるのと絵や画像の使用に相まって、有効な勉強法になるかどうかを検証したい。

・実践授業と対象

大連外国語大学の日本語学部的一年生 54 名(二つのクラス)で、事前調査の対象と同じである。日本語は全員ゼロスタートである。基礎日本語の授業において実践を行った。基礎日本語の授業について、

学年	受講人数	時間	教材
1 年	27 人（日本語専攻のクラス）	週 6 コマ（1 コマ 4 5 分）	《新経典日本語》

・実践時間

11 月 9 日から 12 月 31 日まで、《新経典日本語》第 6 課から第 12 課まで毎課の新出単語リストを実践内容にして実施した。

・実践手順

教師は事前準備として、教科書の新出単語リストの意味をする絵を 1 枚ずつ用意して ppt に添付しておく。ppt に新出単語の出る順は必ず教科書の単語リストに出る順と違うように注意する（出る順番が一緒なら、学生はついに単語リストを頼ってしまう）。

毎週新しい課に入る時、学生が教科書の付 CD(単語リストの部分)を流して復唱する方法で次の授業で教師の演じた PPT(絵や画像)の内容を適合の語彙で言えるように予習してくることを教師は事前に要求しておく。授業の当日、学生が 2 人組み、くじを引いて役割が決まってから、1 人はスクリーンに向って立ち(日本語役)、教師の演じた PPT を適合の語彙で言い出す。もう 1 人はさきほどの人と向かい合うように立ち(中国語役)、パートナーの言った語彙を中国語に訳して言い出す。間違えていたら、席に戻り、ほかの人と入れ換えて引き続きを進行させる。クラス全員が一回りしてから練習が終わることにする。授業の後で、実践で正しく答えられなかった学生を集め、なぜうまくできなかったか一人ずつ話し合いながら事情を伺う。(紙幅の関係で省略する)

・実践例

人数：一つのクラス(27 人)。

内容：《新経典日本語》第 1 冊(第 9 課)。新出単語例 86 語。

時間：11 月 30 日(月)基礎日本語の授業。

問題点：

A 日本語役の問題点

a「答えることができない(4 人)」。動詞が多く見られる。授業の後で聞いたら、理由は二つある。(1)予習をしなかったと予習が不十分だった(予習する時間が足りなかった、予習をしたとしても分からなかった)という。(2)絵の意味を理解できなかったという。b「期待するのとは違った回答が出る(12 人)」。写真の意味が明確でない場合に多く見ら

れる(特に動詞)。主として写真や絵の意味が明確でなかったせいで、学生を誤解させた。ただし、回答が期待するのとは異なっても、合理的なら、本実践の結果統計上、正確だと認めた。c「発音上、正しくない(6人)」。外来語、促音、長音などに多く見られた。

B 中国語役の問題点

a「答えることができない(3人)」。授業の後で聞いたら、予習をしなかったと予習が不十分だったという(予習する時間が足りなかった、予習をしたとしても分からなかった)。b「語彙の実際使う状況など一言ヒントを得たら、答えられた(4人)」。動詞や外来語が多く見られた。たとえば、日本語役の学生が「着る」と言った上で、さらに「服を着る」とヒントをあげたら、答えられた。c「期待する意味と異なった回答が出る(4人)」。複数の意味がある動詞が多く見られた。ただし、回答はその語彙本来の意味ならば、本実践の結果統計上、正確だと認めた。

3 実践結果

教科書の第6課から実践に入ったため、実践例(第9課)を記録したのは実践してから4回目となる。初めての実践(第6課)に比べ、学生全体がだいぶ慣れてき、それに回答の正解率も高くなったが、正しく回答できなかった学生がいる。実践の後、学生との話し合いから、理由が四つまとめられる。

a 予習しなかった。b 予習したが、その場になると、どれがどれだか分からなくなる。
c 一番最初から正しい発音で覚えられなかった。d 写真や絵の意味を理解できなかった。

前4回の実践データーに比べると、本実践はaとbは減る傾向が見られたが、cとdはあきらかな変化が見られなかった。aとbの減少は学生がこの勉強法に少しずつ慣れてきたことで説明できるのであろう。cはおそらく最初の発音段階から残ったままの問題だと思われる、さらに個別指導が必要である。dはまさに教師が反省し、改善すべきところである。

4 結果分析と結論

4-1 学生側の意識変化

第12課まで実践が全部終わった後、実践目標が達成しているかどうか、また実践を受けて学生側の意識に変化があったかどうかを究明するために、アンケート調査をした。認める項目に✓を、認めない項目に×をつけてもらった。54部のうち、各項目を認めた人数をまとめて以下の表に記入した。

	項目	人数
①	この実践を通して、回答の時、反応が早くなった。	40人
②	この実践を通して、習得した単語を容易に忘れない気がする。	19人
③	この実践を通して、語彙の熟達度が高まる。	33人
④	ヒヤリングの面で自信がついてくる。	25人

⑤	日本語で話すとき、困らなくなる気がする。	30 人
⑥	書き取りテストで、長音・促音・濁音など間違いやすいところは段々改善できる。	15 人
⑦	クラスの前で発表すると思ったら、怠け癖を克服して用意しておくことができる。	18 人
⑧	音声を媒介とする勉強法は外国語の勉強に有利だと思うようになる。	53 人
⑨	単語の発音が正しくなり、さらに、日本語の発音がきれいになる。	22 人

①③⑤から見れば、半分を超えた学生はこの実践活動が単語の習得に効果があったと認めた。そこから、実践目標はほぼ達成しているといえる。⑧から学生が 53 人も「音声で覚える」勉強法を認めたのは筆者がこの実践で一番甲斐があったと実感したところであり、学生のこれからの勉強にもきっと役に立つだろうと思われる。その上、筆者にこのような活動を取り入れ続けていく力をつけてくれた。

4-2 教師側の反省

本実践は全課程の途中(第 9 課)から取り入れはじめたので、前後の対照があるからこそ、実践のメリットを学生に強く感じてもらえると思われた反面、学生以前の「書いて覚える」勉強法に慣れてしまい、なかなか改善できないおそれがある。また、教師が情報が分かりやすく意味が明確のような絵や写真を用意することが重要である。それから、初級段階はまだなんとかできるが、中級や上級まで進むと、単語が複雑になるにつれ、意味を単なる絵や画像で表しにくい可能性があるため、この実践方法はまだ適応するかどうかは検討する必要がある。

参考文献

《中学英語语音教学缺失与学生听力理解障碍的相关性研究——以上海市新中高级中学高一学生为例》季晓彦(2013)

『認知心理学 3 言語』 大津由紀雄 編 東京大学出版会(1995) 193 ページ

『認知心理学 2 記憶』 高野陽太郎 編 東京大学出版会(1995) 23 ページ